

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370014

研究課題名(和文) アリストテレス主義批判としてのヒュームの知識論

研究課題名(英文) Hume's theory of knowledge viewed as an criticism of Aristotelianism

研究代表者

秋元 ひろと (AKIMOTO, Hiroto)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：80242923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アリストテレス主義の批判と継承という観点からヒュームの知識論について検討し、以下の諸点を明らかにした。因果論を中心とするヒュームの知識論が、被造物に原因としての力能を認めないという点で、スコラのアリストテレス主義を批判したマルブランシュやバークリの因果論を継承していること。実体論を中心とするロックの因果論が被造物に原因としての力能を認めるという点で、アリストテレス主義を継承していること。したがって、イギリス経験論をロック、バークリ、ヒュームのトリオの仕事と見なす標準的な哲学史記述は書き換えの必要があること。

研究成果の概要(英文)：In this research program, I have examined Hume's theory of knowledge from the perspective of the criticism and inheritance of Aristotelianism, and reached the following conclusions. Hume's theory of knowledge, which mainly concerns the problem of causation, in denying that creatures have causal power inherits the causal theory of Malebranche and Berkeley, which is critical of the scholastic Aristotelianism. By contrast, Locke's theory of knowledge, which mainly concerns the problem of substance, in affirming that creatures have causal power inherits Aristotelianism. And therefore, the standard description of British empiricism, which regards it as a work accomplished by the trio of Locke, Berkeley and Hume needs reexamination and rewriting.

研究分野：哲学

キーワード：ヒューム ロック バークリ 因果論 アリストテレス主義

1. 研究開始当初の背景

イギリス経験論を代表する哲学者としてロック、バークリ、ヒュームの三人を取り上げ、ヒュームをイギリス経験論の到達点に位置づける解釈は、トマス・リード以来のもので、現在でも哲学史の標準的記述となっている。デカルトの意識内在の立場を受けついでロックが、観念の理論として開始した経験論の哲学は、バークリを経てヒュームに至る過程において次第に徹底され、ヒュームは、因果関係、外界存在、精神実体の存在についての懐疑論に至ったというわけである。

この解釈図式にカントを接続すれば、やはり常識的と言えるつぎのような哲学史記述が成立する。すなわち、ヒュームの哲学、とくにその因果論は、カントを「独断の微睡」から目覚めさせるという仕方で、カントの批判哲学の形成に貢献する一方で、カントの超越論的観念論によって乗り越えられたというわけである。

また、より現代的な観点から見れば、ヒュームの哲学は、論理実証主義者たちによって再評価され、その後の英米を中心とする哲学においても批判的に継承されている。これも、やはりよく知られた哲学史の事実であろう。

さて、こうした哲学史記述には、ヒュームの哲学と、先行思想との関係を十分に描き切っていない面がある。先行思想との関係というのは、長めのスパンをとれば、古代から中世そして近世へと受け継がれたアリストテレス主義の伝統との関係であり、短めのスパンをとれば、イギリスのベーコンやホッブズ、大陸のデカルト、スピノザ、ライプニッツ、マルブランシュなどとの関係である。

上記の点にかかわる研究としては、すでに Loeb (1983), Clatterbaugh (1999), Hacking (2006) などがあるが、本研究は、それらの研究も踏まえつつ、とくにスコラのアリストテレス主義の継承と批判という観点から、ヒュームの知識論を哲学史のなかに位置づけ直し、その再検討と再評価を行うことが必要であるとの考えに立って構想された。

<文献>

Clatterbaugh, Kenneth (1999)
The Causation Debate in Modern Philosophy, 1637-1739.
Hacking, Ian (2006)
The Emergence of Probability.
Loeb, Louis E. (1983)
From Descartes to Hume, Continental Metaphysics and the Development of Modern Philosophy.

2. 研究の目的

本研究は、スコラのアリストテレス主義の継承と批判という観点から、ヒュームの知識論を哲学史のなかに位置づけ直し、その再検

討と再評価を行うことを目的とした。

より具体的には、以下の3点の解明を通じて、上記目的を達成することを目指した。

(1) 近世イギリスにおけるアリストテレス主義の批判と継承の実態を、とくにベーコンとホッブズの知識論にそくして明らかにする。

(2) ヒュームの因果論が、マルブランシュの因果論のアリストテレス主義批判の延長線上に成立したものであることを明らかにする。

(3) ヒュームの因果論を中心とする知識論とロックの実体論を中心とする知識論が、前者はアリストテレス主義を継承しているのに対して後者はそれを批判しているという点で性格を大きく異にするものであることを明らかにする。

3. 研究の方法

上記(1)(2)(3)の解明を、それぞれ平成25年度、平成26年度、平成27年度に実施するという仕方で研究を進めた。

(1)平成25年度

ベーコンの『ノヴム・オルガヌム』とホッブズの『物体論』等の読解を通じて、アリストテレス主義の批判と継承という観点から、両者の知識論の比較検討を行った。

参考文献としては、ベーコンについては Perez-Ramos (1988)などを、ホッブズについては Ludwig (1998)などを利用した。

(2)平成26年度

マルブランシュの『真理探究論』『釈明』、ヒュームの『人間本性論』『人間知性探究』の読解を通じて、アリストテレス主義の批判と継承という観点から、両者の因果論の比較検討を行った。

参考文献としては、Hacking 2006, McCracken (1983), Ott (2009)などを利用した。

(3)平成27年度

スコラの因果論を踏まえつつ、ロックの『人間知性論』、バークリの『運動論』、ヒュームの『人間本性論』『人間知性探究』の読解を通じて、アリストテレス主義の批判と継承という観点から、実体論を中心とするロックの知識論と、因果論を中心とするヒュームの知識論の比較検討を行った。

参考文献としては、スコラの因果論については Fressoso (2002), Schmaltz (2008)を、ロックとヒュームの知識論については Ott (2009)などを利用した。

<文献>

Fressoso, Alfred J. (2002)
“Suarez on Metaphysical Inquiry, Efficient Causality, and Divine Action.”
Hacking, Ian (2006)
The Emergence of Probability.
Ludwig, Bernd (1998)
Die Widerentdeckung des Epikureischen

Naturrechts: Zu Thomas Hobbes' philosophischer Entwicklung von De Cive zum Leviathan im Pariser Exile 1640-1651.

McCracken, Charles J. (1983)

Malebranche and British Philosophy.

Ott, Walter (2009)

Causation and Laws of Nature in Early Modern Philosophy.

Perez-Ramos, Antonio (1988)

Francis Bacon's Idea of Science and Maker's Knowledge Tradition.

Schmaltz, Tad M. (2008)

Descartes on Causation.

4. 研究成果

(1)平成 25 年度

ベーコンとホッブズの知識論を取り上げ、両者の比較検討を通じて、17 世紀のイギリスにおいてアリストテレス主義の継承と批判がどのように行われたのかを明らかにした。

ベーコンとホッブズは、ともに「原因の探究」だけでなく「結果の産出」という観点からも知識を特徴づけることによって、観想知（理論的知識）を知識の規範と見なすアリストテレス主義の知識論を批判して、制作知ないし技術知（実践的知識）を知識の規範と見なす知識論を展開した。しかし、ベーコンがアリストテレス主義のオルガノンに代わる新オルガノンとして帰納法を提唱したのに対して、ホッブズは、演繹法を中心とするオルガノンの伝統を継承した。この相違は、二人の制作や操作の捉え方の異同と関係している。すなわち、自然学の革新を目指して知識論を展開したベーコンが問題にするのは、自然のプロセスへの操作的関与である。それは、実験に典型的に見られるような、自然物を対象として行われる具体的・実操作的な操作である。それに対して、幾何学をモデルとして知識論を展開したホッブズが問題にするのは、理論的対象（たとえば幾何学図形）を対象として行われる抽象的・理論的な操作（たとえば図形の作図にかかわる操作）なのである。

このように、ベーコンとホッブズには、アリストテレス主義の継承と批判の仕方に関して相違が見られるが、ベーコンは近代の実験科学に通じる自然学のある面を的確に捉える知識論を、ホッブズは幾何学のある面を的確に捉える知識論を展開した。そしてホッブズは、国家を幾何学図形と同様の理論的対象と見なして、そのいわば作図法を示すという仕方で、政治学の幾何学的展開を図ったのである。

(2)平成 26 年度

ヒュームの因果論が知識論と形而上学の大変革を目指したものであることを明らかにするとともに、後者の形而上学の大変革が

マルブランシュによるアリストテレス主義批判の路線を受け継ぐという仕方で成し遂げられたものであることを明らかにした。

知識論の大変革について

普遍性と必然性をもつ真理の認知である「知識 knowledge」と蓋然性しかもたない認知である「意見 opinion」との区別は、中世知識論の伝統的な区別である。そして、この区別はルネサンス期には「原因 cause」と「しるし sign」の区別と重ね合わせて理解されていた。すなわち、知識の領域である実在世界に属するものが原因であり、意見の領域である現象世界に属するものがしるしであるとされていたのである。

それに対してヒュームの知識論は、伝統的な知識論のこうした概念配置の転換を図るものであった。このことは彼の名著『人間本性論』の知識論の構成によく示されている。

『本性論』第 1 巻第 3 部は「知識と蓋然性」という、伝統的な知識論の二分法を踏まえた表題をもつ。しかし、ヒュームは、従来の知識論が知識に研究関心を集中して、蓋然性の研究を疎かにしてきたとして、蓋然性に研究関心を集中する。実際、第 3 部を構成する全部で 16 の節のうち知識を主題とするのは第 1 節のみで、残りの 15 の節はすべて蓋然性ないしそれに関する事柄を主題としている。そして、蓋然性をめぐる考察の中心を占めるのが、因果推論の可能性の条件を問うという仕方で展開される因果論なのである。

こうしてヒュームは、伝統的には知識の領域に属するとされた原因の概念を、蓋然性つまり意見の領域に移し替えて研究するという仕方で、伝統的な知識論の概念配置を組み替えて知識論を展開したのである。

形而上学の大変革について

ヒュームは、因果推論の可能性という知識論の問題に加えて、原因がもつ「力能 power」ないし「効力 efficacy」の在り処という形而上学の問題も論じている。それは、スコラの因果論を経て近世へと受け継がれた問題であった。

スコラの因果論の標準的見解は「協働論 concurrentism」と呼ばれるもので、それは、神を第一原因とみなしつつも、第一原因である神と第二原因である被造物が協働して結果を産出するとする見方であり、神と被造物の双方に原因としての力能を認めるものである。これに対して、神と被造物の区別を強調する立場からスコラのアリストテレス主義が被造物に原因としての力能を認めた点を批判したのが、マルブランシュらの見解として知られる「機会原因論 occasionalism」である。それは、「真の原因」として力能をもつのは神のみであり、被造物は、原因としての力能をもたない「機会原因 occasional cause」であるに過ぎないとする見解であった。

さてヒュームは、原因の力能の在り処を論じて、マルブランシュの機会原因論を批判し

ている。しかし、ヒュームの立場は、マルブランシュによるアリストテレス主義批判を受け継ぐという仕方でも成立したものである。マルブランシュは、被造物に原因としての力能を認めるアリストテレス主義を批判しつつも、力能を、それを神に限定するという仕方ではあれ、対象世界の側に位置づけ続けた。それに対してヒュームは、因果推論を行うことを通じて対象世界に因果関係を設定するわれわれ人間の精神の側に、力能を位置づけるという仕方でも、マルブランシュによるアリストテレス主義批判を先鋭化させたのである。

(3)平成 27 年度

因果論を中心とするヒュームの知識論と、実体論を中心とするロックの知識論を比較することを通じて、ヒュームが、マルブランシュによるアリストテレス主義批判を、マルブランシュから直接、あるいはパークリを経由して受け継いでいること、それに対してロックは、アリストテレス主義をある仕方でも継承していること、したがって二人の知識論が大きく性格を異にするものであることを明らかにした。

ヒュームとアリストテレス主義

ヒュームがマルブランシュによるアリストテレス主義を受け継いだことは、平成 26 年度の研究ですでに明らかにしたが、因果論に関するかぎり、パークリは、マルブランシュにきわめて近い立場をとっていたと考えることができる。

パークリは、マルブランシュとともに、神を第一原因と見なして被造物世界の出来事を説明しようとしたのであって、そのかぎりではスコラ学の図式を受け継いでいる。しかし、スコラ学のアリストテレス主義の要素、すなわち被造物が第二原因として力能をもつことを認める点は批判し、原因として力能をもつのは神のみとしたのである。その結果、被造物の世界は、もっぱら受動性が支配する結果のみの世界、原因もその力能も不在の世界となった。

そして、被造物世界に関するマルブランシュとパークリのこのような理解を受け継ぎつつ、独自の因果論を展開したのがヒュームだったのであり、因果論の系譜という観点から見れば、ヒュームは、スアレスからマルブランシュを経てパークリに至るラインの延長線上に位置しているといえることができる。

ロックとアリストテレス主義

ロックが、基体としての実体というアリストテレス主義の伝統的な実体概念を批判したことはよく知られている。それにもかかわらずロックは、実体概念それ自体を放棄したわけではない。実際、彼は、実体とその本質規定について語り、各種の実体に固有な本質の探究というアリストテレス主義の自然学の枠組みは継承している。彼の認識論的問題関心もそうした自然学の可能性、実体の本質を捉える知識の可能性にあったのである。

そしてロックは、原因がもつ力能も、実体とその本質規定という枠組みのなかに組み込み、実体の本質規定にかかわる性質の一つとして扱う。これは、被造物に原因としての力能を認めるということであり、スコラ学の因果論のアリストテレス主義の要素を受け継ぐということにはかならない。一方、原因の力能をもっぱら被造物の事柄として扱うロックは、神を第一原因と見なすスコラ学の図式は採らないのであるから、原因の力能の理解に関するかぎり、彼は、スコラ学者以上のアリストテレス主義者であるとさえ言い得るのである。

このようにアリストテレス主義の批判と継承という観点から見ると、ロックは、パークリやヒュームとは異なる特異な位置を占めていることが分かる。イギリス経験論を、単純にロック、パークリ、ヒュームのトリオの仕事と見なすことはできないのであって、ヒュームの知識論も、こうした観点から、大陸の哲学者たちとの関係も踏まえて理解しなおすことが必要なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

秋元ひろと

実体と因果関係 アリストテレス主義の継承者ロックと批判者ヒューム
三重大学教育学部研究紀要,第 67 巻,2016,
49-60. 査読なし

秋元ひろと

ヒュームの因果論 知識論と形而上学の「大変革」
三重大学教育学部研究紀要,第 66 巻,2015,
29-38. 査読なし

秋元ひろと

scientia と potentia ベーコンとホッブズの知識論
論集,三重大学哲学思想学系・哲学倫理学教室,
第 16 巻,2014,78-93. 査読なし

〔学会発表〕(計 2 件)

秋元ひろと

因果関係の認識論と形而上学 スアレスからヒュームまで
中部哲学会,2015 年 9 月 27 日,富山大学(富山県,富山市)

秋元ひろと

ホッブズの知識論
哲学会,2013 年 10 月 26 日,東京大学(東京都)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋元 ひろと (AKIMOTO, Hiroto)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：80242923

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：